

## 水稻後1～2年目の転換畑での小麦「ゆきちから」の窒素施肥量

### 【1 成果の概要】

- (1) 水稻後転換1～2年目の小麦作で、基肥窒素施肥量を成分量で6 kg/10a にすることで越冬後の茎数が増加します(図1)。
- (2) 融雪期追肥は現行基準の2 kg/10a では生育が劣る傾向であり4～6 kg/10a が適当です(図)。
- (3) 穂揃期追肥は、収量および原粒タンパク質含量を確保するために4～6 kg/10a が適当で、6 kg/10a 施用によりタンパク質含量が高まる傾向がみられます。(図3)。  
特に止葉抽出期有効茎数が多い場合は、6 kg/10a 施用により原粒タンパク質含量を高めることができます(図4)。

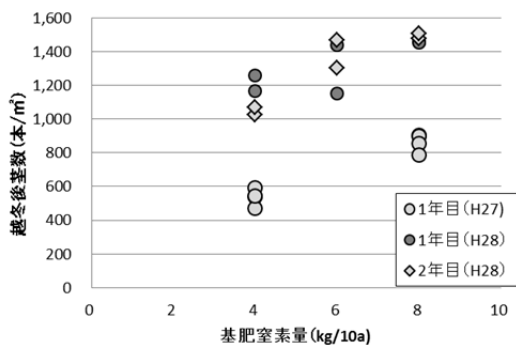


図1.基肥窒素施肥量と越冬後茎数の関係

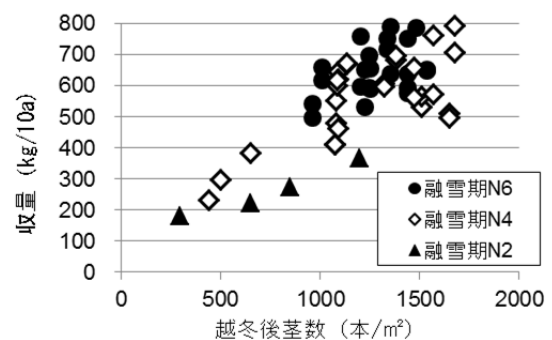


図2.融雪期追肥量と収量の関係

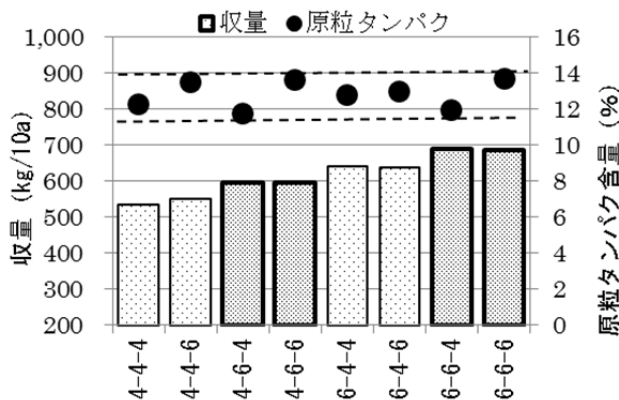


図3. 窒素施肥量と収量、原粒タンパクの関係  
横軸数字は 基肥-融雪期-穂揃期の窒素施肥量(kg/10a)

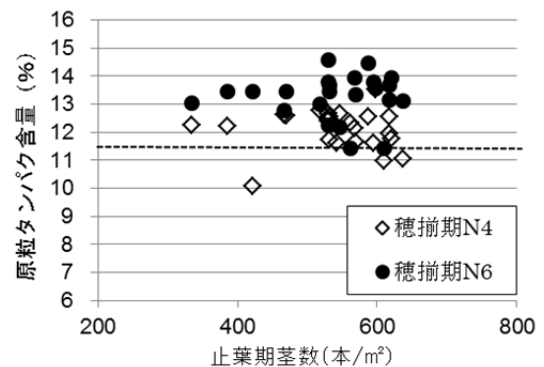


図4.止葉抽出期有効茎数と穂揃期N追肥量  
および原粒タンパク質含量の関係

### 【2 留意事項】

- (1) 水稻後転換1～2年目の研究センター内圃場で行った試験結果です。有機物施用は稲わら、麦稈のすき込みのみです。
- (2) 播種期は10月上旬、播種量は7kg/10aの条件で行いました。
- (3) 転換畑でも堆肥の施用を行っている圃場では、地力窒素の供給が見込めるので従来の施肥基準で栽培してください。